HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヴラディーミル・サンギ氏録音による1970年代のニヴフ語音声資料について
Author(s)	丹菊, 逸治
Description	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
Relation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed.
Citation	サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書, 95-98
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38303
Type	conference paper
File Information	10tangiku.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サハリンの言語世界（津曲敏郎編，北海道大学大学院文学研究科，2009: 95–98）

ヴラディーミル・サンギ氏録音による1970年代のニヴフ語音声資料について

丹 菊　逸 治
（和光大学　非常勤講師）

ヴラディーミル・サンギ氏（1935年生まれ、チャイヴォ出身、作家・詩人）は1970年代にニヴフ口承文学の再話作品を数多く発表しているが、当時彼はその取材のためにオープンリール式録音機を用いていた。2003年に、録音資料のうち9時間20分がILCAA（アジア・アフリカ言語文化研究所、東京外国語大学）でデジタル化された。CD付きテキストを順次刊行中（丹菊逸治 2008『Ⅴ．サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集（1）：フトククさんの昔話と体験談』ILCAA）。この資料がニヴフ語およびその口承文学研究においてどのような意味を持つのかを簡単に報告する。

シュテルンベルグ以降、ニヴフ語の録音資料・筆録資料はある。ただし良質でまとまった録音資料は少ない。アウステルリッツ資料（1956年）、サンギ資料（1972年）、その後おそらく1990年前後までまとまった録音資料はない。

サンギ資料（ILCAA)に含まれる散文物語資料
・Ekaterina Hytkuk (Hətkuk)（ルンヴォ出身 1908-1979）昔話（*t^{h}əlgur^h*）7話、体験談（*k^{h}er^h*）1話、叙事詩（*ŋastund*）1話
・Vagzuk（ポロナイスク出身？）昔話2話
・Kolka（西海岸出身？）昔話1話

１．口承文学研究資料として
（１）物語の「あらすじ」ではなく、本格的なパフォーマンスである。話の一部ではなく全体が多数収録されている。

（２）散文物語と叙事詩、体験談とジャンルが多様
前後の会話などから、ジャンル名が確認できることがある。例えば*k^{h}er^h*「体験談」が*t^{h}əlgur^h*「散文物語」と呼ばれていないことがわかる。

（３）語り手と聞き手がそろった「語りの場」が録音されている
叙事詩は語り手に歌うように皆が要求すること。また、叙事詩の「合の手」はその一部である。また、散文物語に合の手は入らないことが確認できる。散文物語の導入部などでは「～氏族の伝承である」などのやりとりが確認できる（それは話の一部ではない)。

（４）類話研究
・「空家の化物」（Hətkuk）
ニヴフに「空家の話」は2種類あるが両方ともウイルタ経由で伝わった可能性がある。

①廃村の丸太小屋の戸口で、母親が子どもを中の化物に預けてしまう。これはピウスツキ資料などでニヴフ人が語る「ウイルタの伝承」として採録されている。
②吹雪を避けて無人の冬住居に入り、そこで化物に遭遇する。あとで引き返して退治する。これはサハリンでアイヌ、ニヴフが語っている。Hətkuk によればこれが「ウイルタの伝承」である。ただし、「ニヴフ人にも同じ伝承がある」とも言っている。Hətkuk は他にもウイルタ人に関連する伝承を語っている。

・「カスベの息子」（Vagzuk による、未刊）
「ポロナイスクの伝承」らしいことがやりとりから分かる。このタイプの話がニヴフ居住地域南限（ルイヴン氏族、ルンヴン氏族）の伝承という可能性がある。
19 世紀末にシュテルンベルグが類話を多数採録（採録地と思われるチルウンヴドは内陸）。クレイノヴィチ『サハリン・アムール民族誌』（枡本哲訳：法政大学 1993、原著：1973）によれば「ルイヴンの伝承」である（西海岸中部サハリン方言地域）。ルイヴンはアイヌと婚姻関係にあったとされる氏族である。服部健の遺稿（ポロナイスク）にも類話がある。この地域はチルウンヴドと関係が深い。

・「死後の世界への往還」（Hətkuk による）
サンギの再話テクストの「原資料」にあたる。伝統的な語りの要素と、再話時に追加された要素の判別の決め手となる。ただし、サンギの再話テクストは別の語り手のものということになっている。また「死後の世界への往還」は他に採録資料が多い。

２．言語研究資料として
（５）話者の方言
・Hətkuk（女性）→ルン湾出身→ポロナイスクからみて北部の隣接氏族。チルウンヴド方面のニヴフ人は冬期ルン湾方面で漁労（アザラシ猟など）をしていた。
・Vagzuk（女性）→ポロナイスク出身？→アウステルリッツ録音の話者と同じ出身。
・Kolka（男性）→西海岸出身？ 各地を転々とし各地の方言が混じるという（サンギ）。

Hətkuk, Vagzuk の方言はチルウンヴド方言に非常によく似ている。
・母音（および流音）間の摩擦音が無声音で発音される。（チルウンヴド方言と同じ）
・動詞の終止形語尾がまれに*-d* ではなく*-nt/-nd* と発音される。（チルウンヴド方言と同じ。この傾向はポロナイスクではより強くなる）
・1 人称複数の人称詞 *nin* の代わりに *min* が用いられる。（現在のチルウンヴドでは *nin*）

Nivkh Phonetic Materials Recorded by Vladimir Sangi

Itsuji TANGIKU
(Wako University)

Vladimir Sangi (1935-) has recorded many Sakhalin Nivkh folkstories and music (including songs and instruments). A part of his materials (9 hours 20 minutes in open reel tapes) was digitalized in 2003 by ILCAA (Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa) and was partly published with a compact disc (*Folktales and Stories recited by Hytkuk,* 2008, ILCAA). The following is an outline of his materials.

Performers
Ekaterina Hytkuk (born in Lun'vo, 1908-1979): 8 stories (*thylgurh* and *kherh*) and 1 epic (*ngastund*).
Vagzuk (born in Poronaisk?): 2 stories (not published).
Kolka (born in West Coast?): 1 story (not published).

Some characteristics of the materials:
(1) The stories are not a digest but a whole.
(2) The materials include various genres: *kherh* (life stories), *thylgurh* (folkstories) and *ngastund* (epic). Sometimes the performer herself referred to the name of the genre.
(3) The recorded materials include conversations about the stories. It may help to study the situation of performance of traditional stories.
(4) They are useful to study the variants of story.
・"The Devil in an Empty House"
There are 2 types of this story told in the Nivkh language. Both of them may not be a Nivkh original story.
(a) An Uilta woman went to an old village which had been deserted long time ago. She didn't know it and she passed her own baby to the devil in an old house. (Pilsudski 2003 commented it as an Uilta story)
(b) A man on a dog sledge lost his way in the snowstorm. He took a shelter to an empty house and met a devil. ("This story is originaly Uilta's, but Nivkh also know the same story" (Hytkuk)).
・"The Son of a Skate"
This story was told by Vagzuk and originally from the southern edge of the Nivkh territory (Poronaisk?). Kreinovich wrote it as "Rujvun clan's story". Shternberg gathered several variants in Chir-Unvd (which is not a coastal village).
・"Journey to Another World"
Many variants have been known. V. Sangi himself also made his own story based on

the materials. Hytkuk's variant must be one of the source.

(5) Dialect

The dialect of Hytkuk and Vagzuk is close to that of Chir-Unvd in the following points:

・The fricatives between vowels (and *l*) have a strong tendency to be devoiced: eg. *eghlng* (Chaivo)/ *exhlng* (Hytkuk, Vagzuk).

・Terminal form of verb often ends in *-nd/-nt* (always *-d* in Chaivo).

・The first person plural pronoun *min* (cf. Chaivo *nin*).